

# 尾張北部

まちと山をつなぐ  
自然を守り、育て、  
うらやまの

## North Owari

瀬戸市、春日井市、犬山市、小牧市

まちのすぐそばの森《うらやま》の自然価値を高めるためには、人の手を入れる必要があります。この森は濃尾平野の上流に位置し、下流部の洪水を防ぐなど、人々の暮らしを守っています。尾張北部生態系ネットワーク協議会は、もう一度自分たちの自然がまちのすぐ裏にあることに気付いてもらうため《うらやま》の活動に取り組んでいます。

協議会テーマ

《うらやま》の豊かな自然を再発見しよう



環境学習と協働拠点「犬山里山学センター」の様子

《うらやま》はまちと山のつなぎ目の役割 体験や広報で住民の関与を高める

湿地が多く東海丘陵要素植物群が分布するこの地域は、希少な生きものが見られる生物多様性の高いエリア。市街地が近い《うらやま》は、近年、開発圧力が低下していますが、人の関わりが薄くなって適正な管理が及ばず、森では日照不足で、草地では外来種の影響で、人知れず絶滅の危機に瀕する種も。

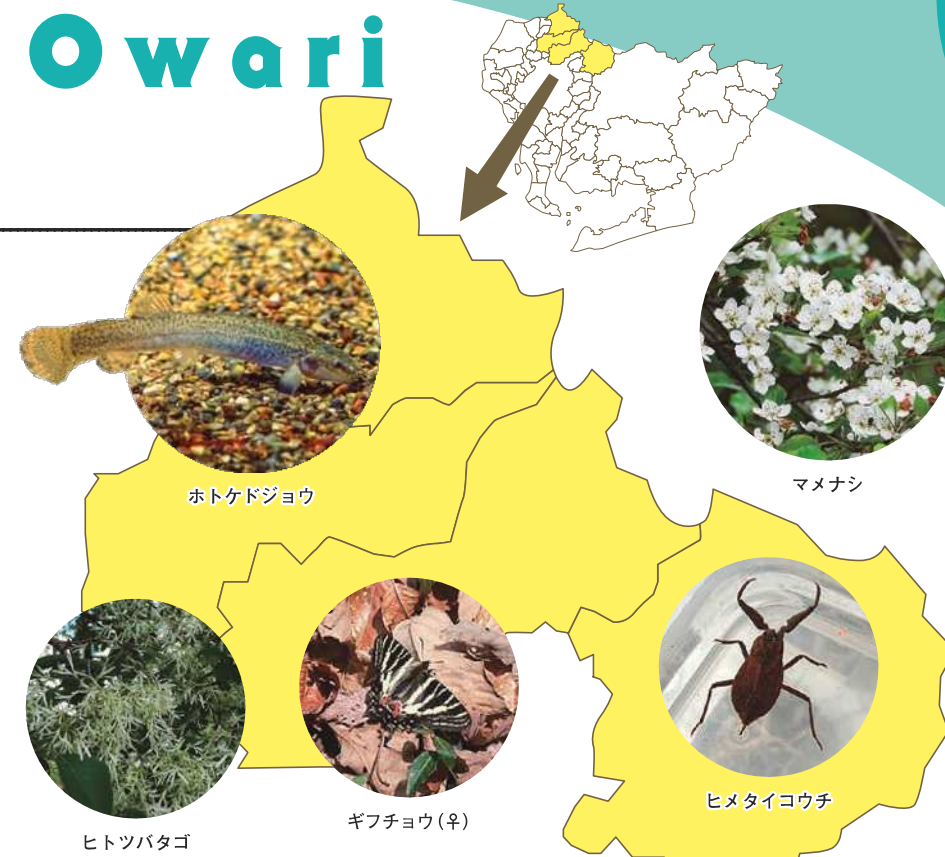
そこで、「眺めることから、関わる自然へ」の転換をキャッチフレーズに、《うらやま》へ関心を持ち、生物を守る意義を理解し、守る活動に関わっていただくことを目指して、市民参加型の取組を展開。犬山里山学研究所理事長の林進会長は「今後は、食やふるさとのものづくり、遊びなどでさらに多くの方に意識を向けてもらい、活動を通して守り続けていきたいです」と語ります。



「環境学習」の様子

研究と環境学習を織り交ぜ、地域住民にアピール

このエリアには、湧水地、ため池、その下流に独特の水田生態系がありますが、ブルーギルやオオクチバスなどにより、二枚貝やカワバタモロコなどの在来種が駆逐されています。その対策として同協議会は定期的に池干しをして、増えすぎた外来種を駆除しています。一度棲みついた外来種の完全駆除はできませんが、外来種の密度を適正に管理することにより、在来種との共存を図ることは可能です。池干しには、有志を募集し、市民参加型の環境教育の場として活用して地域住民にアピールしています。それと同時に、協議会構成員のみならず、他団体からの参加も受け入れ、ノウハウの共有化を図っています。実施結果は研究報告に取りまとめ、行政と成果を共有しています。



ホトケドジョウ

マメナシ

ヒツバタゴ

ギフチョウ(♀)

ヒメタイコウチ



犬山里山学センターでの「展示活動」の様子

教えるより体験を大切に。活動を通して人を育て続けていく

活動継続には人材育成が、活動拡大には新たな仲間が必要。この課題に対し林会長は「年齢が活動を制限するとは思いません。社会的現役世代の若手人材の確保は困難でも、シニア世代の人材が豊富なのはエイジフリーの活動成果。また親子参加の活動により、ジェンダーフリーと世代間伝達の人材育成の成果を獲得していると考えています」と語ります。

さらに「他の協議会と経験を共有・伝達し合うため、地域留学のように他地域の経験を持ち帰る仕組みがあってもいいですね」（林会長）と相互体験による人材交流を重視。人気の昆虫教室でも、捕まえた生きものを図鑑で調べ、標本にまでする実物学習の効果は大きく、子どもたちは内発的に興味・関心を持ち、一生懸命に取り組むそうです。

地域の生態系

ギフチョウ、カワバタモロコ、ホトケドジョウ、ヒメタイコウチ、マメナシ、シデコブシ、ヒツバタゴ



「昆虫教室」の様子



善師野での植樹の様子

＜おもな活動＞

- ・教育機関、公共施設におけるビオトープの創出
- ・地域住民の協力によるニュータウン内の樹木構成の改善
- ・里山林の再生と活用、新しい森林産業の育成
- ・竹林の管理と竹材の利用開発
- ・耕作放棄水田をなくし、農村風景を取り戻す
- ・種の保全を図る里山バンキングとミチゲーション

「ため池を結ぶビオトープ回廊整備」の様子



【構成団体一覧】18団体

＜大学等 2＞

学校法人 中部大学、名古屋経済大学・短期大学部

＜企業等 3＞

エスベックミック株式会社、中日本高速道路株式会社、徳倉建設株式会社

＜NPO、各種団体等 8＞

NPO法人 犬山里山学研究所、NPO法人 海上の森の会、NPO法人 グラウンドワーク東海、公益財団法人 日本モンキーセンター、パブリックワークス 犬山市アムニティ協会、ふるさと自然を愛するスズサイコの会、みろく山麓の自然を守る会、リリオの会・こどもフォーラム

＜行政機関 5＞

瀬戸市、春日井市、犬山市、小牧市、愛知県